

銀音体

KYO-TAI
EXHIBITION

銀音体

LIVE



小
阪
淳
個
展

2022
12
23 - 29

2022.12.23(Fri.)~29(Thu.) 11:00~20:00
*12.23 11:00~17:00 (for Opening Talk Live)
*12.27 Closed (for Live)

TE Pita Records 門天



2022
12
23

Live vol.1 2022.12.23 (Fri.)
Live vol.2 2022.12.27 (Tue.)
18:30 Open 19:00 Start

2022
12
27

小阪淳個展 「響体」

2022.12.23 (Fri.)~29 (Thu.) 11:00~20:00 *12.23 11:00~17:00 (for Opening Talk Live)
*12.27 Closed (for Live)

美術家、小阪淳のクリエイションは、建築・数学的思考を出発点に、CGビジュアル、メディアアート、社会風刺、科学コミュニケーションなど領域横断的に展開されている。

大阪大学工学部建築工学科、東京藝術大学大学院美術学部建築科在学中よりデザインやアートの数々のコンペティションで受賞。

90年代から2000年にかけてSFマガジンの装画を制作(1996年読者賞受賞)。

国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクトとのインタラクティブ・メディア作品『4D2Uナビゲーター』でカンヌ国際広告祭2007 Cyber Lions銅賞、文化庁メディア芸術祭審査員推薦作品選出。

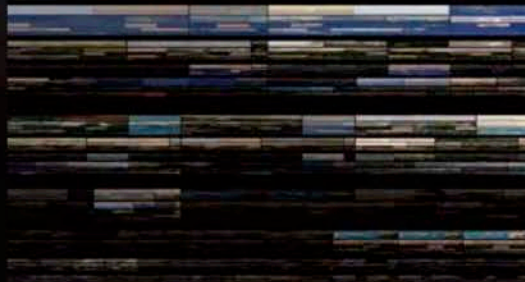
Sony ExploraScienceにメディアアート4作品常設。

近年は、朝日新聞の誌面(論壇時評)の一角に、現代社会をイメージしたCGヴィジュアル作品を月一度発表の他、文部科学省「家に一枚宇宙図」制作や、国立天文台のコミュニケーション天文学との共同制作、天文学専用スーパーコンピュータアレイのデザインなど、天文学を含む学術との協働による美術活動を展開。

ゲームエンジンを使用したインタラクティブなメディアアート作品『M20』は2011年東京都写真美術館にて展示後收藏、シンブルな数式を元にフラクタル関数より導かれた造形を生み出す『(0)』は2018年種子島宇宙芸術祭で展示、オーディオビジュアル作品『Echoline』(音楽・宮本朝子)は、2020年Société des arts technologiques [SAT] (モントリオール・カナダ)のコンペティションに選出され展示上映されている。

今回の個展では、これまでの各創造領域の中からセレクトされた作品を一部リニューアルして展示すると共に、「ほぼ針だけで構成された」立体造形物の新作『時形』のほか、2022年夏に初演された話題を呼んだ映像楽譜や、Aーとの協働作品が、会期中生演奏により上演されるなど、小阪の創作活動の現在形が展開される。

展示作品詳細についてはこちらから



主催：TMD PHOTO WORKS

共催：一般社団法人もんでん

LIVE 音体

高梨直紘



宮木朝子



大石将紀



小阪淳



小阪淳のマルチメディア作品・CGビジュアル・立体造形物の3種類による展覧会自体を、
両国門天ホールでライブ化する2つのコンサート。

Vol.1 "Unbuilt place"その後 ~ 未来の「作られない場所」
+ トークライブ: 宇宙図からシミュレーション図へ

2022年12月23日(金) 18時半開場 19時開演

ヴィジュアル: 小阪淳 作曲、エレクトロニクス: 宮木朝子
音楽 (Unbuilt Placeより) 小阪淳、高橋征司、宮木朝子、クリスチャン・サネジ
トークゲスト: 高梨直紘

・小阪のアートディレクション、ジャケットデザインにより制作された電子音楽音楽のコンピレーションアルバム『Unbuilt Place』(CD)の
作品を、サラウンドの音響環境と曲ごとに制作されたヴィジュアルイメージと共に上演。
・また、2022年現在のA-との協働により制作されたオーディオヴィジュアル作品『Passion in Air』(宮木朝子との共作)の上演。
・さらに小阪とともに「宇宙図」のプロジェクトを推進する東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム 特任准教授で天文学
普及プロジェクト「天プラ」代表、高梨直紘をゲストに、科学とアートを巡るヴィジュアル実践についてのトークイベントを行う。

Vol.2 "Evangelium"から「YADORI」へ「映像楽譜」と仮想空間へ

2022年12月27日(火) 18時半開場 19時開演

映像: 小阪淳 作曲、エレクトロニクス: 宮木朝子
サクソフォン: 大石将紀

・2009年、大石将紀のサクソフォン演奏によるライブエレクトロニクスとして制作された
『Evangelium』におけるヴィジュアルイメージから始まり、2022年夏両国アートフェスティバルで初演
された話題を呼んだ『Yadori, Scape, Notation ~ game 映像と楽器奏者のための』の映像楽譜としての映像
を、サラウンドによる電子音響とサクソフォンの即興演奏として読み解いていく試みまで、その軌跡を辿る。
・2015年台湾で初演された『Beabox video』の他、2020年『Société des arts technologiques (SAT)』
(モントリオール・カナダ)にて展示上演された、フラクタル映像表現による『Echolalia』。2019年能楽
堂で初演された映像とサラウンド音響による『MAKINU』など、作曲家宮木朝子の「ラボレーション」に
よる作品が上演される。

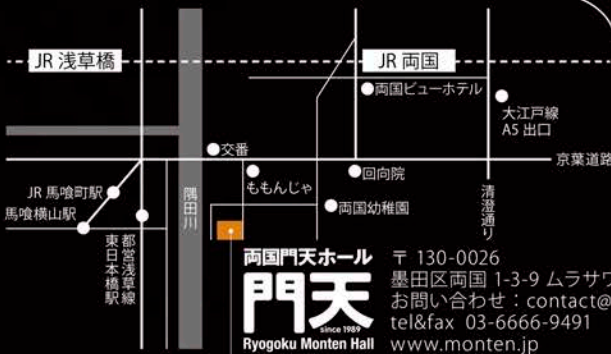
チケット:
両日とも3000円

ライブインフォ 23日チケット

27日チケット



主催: 一般社団法人もんでん 共催: 10000 MONTEEN



小阪淳個展『響体 -形の間、音の間-』 展示作品解説

《f(p)》 (2022年バージョン)

数学によってさまざまな形を描くことができる。直線、円、放物線や球も簡単な式で表わせる。これらの式を拡張することによって驚くべき形を生み出すことができる。数学から導き出される形は、あるときは大地のように、あるときは技術の粋を集めたもののように、またあるときは、宗教的な建築物のように見える。自然の世界であれ、人工の世界であれ、その根本に数学が宿っていることを体験する作品。

《VIT2.0》 (2022年バージョン)

シンプルな食物連鎖を、プログラム上でシミュレーションしている。鑑賞者は消費者となってジョイスティックで動くことができる。消費者がフンをすると鑑賞者はフンとなってしまふ。フンは分解者に取り込まれ、土にかえり、植物となり、果実となって消費者に再び戻る。つまり食物連鎖の「循環」の側に視点を置いた作品。私たちはゲームでいろいろなモノになるが、コンピューターの自由度をもってすればもっと自由な視点の置き方ができるのではないかと考えた。プログラミングはUnityというゲームエンジンを使っている。

《BeatboxTV》 (2022年バージョン)

テレビから流れる映像と音声をリアルタイムにサンプリングした音声をもとに、再構築して、音楽的なループを作成し続けるコンテンツ。鑑賞者はテレビのチャンネルを変えることができる。チャンネルを変えることによって、サンプリングされる番組を変更することができる。単純に重ね合わせただけでは音楽的には聞こえず、どんどんノイズになってしまうが、音のタイミングと、スケールに合うように半音以下の音声のピッチシフト (Autotune)、非倍音成分の適度なフィルタリング (7連コームフィルター) などにより聴覚上の音楽性を形成している。音声の分割は、ある程度の大きな音がアタック感を持って入力されると、そこを音の始まりとみなし、小さな音の状態が持続、あるいは次のアタック音が来ることを持って音の終りとする。様々な長さの音がサンプリングされるが、音の長さで3つに分類し、それぞれを内蔵されたシーケンサーによって呼び出している。

テレビの番組はそれが1つの完成されたものだが、それを素材とみなして再構成するような作品の前例はいくつか存在する。この作品はテレビ番組の再構築といった

- ・リアルタイムであること
- ・自動であること といった新規性を持つが、ある意味、MAXなどの特性を考えればとても自然な表現だともいえるだろう。アルゴリズムと作家が介入しえない要素 (テレビ番組) によってその場限りの作曲を行なっていくという、音楽のあり方を提案している。

《生と死の距離》 (2008) 旗、銃、ミサイル、戦車

黒く描かれたオブジェクトはすべて、人を殺すためのものである。そしてこの絵の視点となっているのは、殺されゆくものの視点である。その上にはテキストが書かれている。これらの言葉は、それを発するとき、自分自身の死のことなど全く考えていないであろう瞬間だ。この、死を全く意識しない時こそが最も「生」である瞬間と見做せばこの作品は生と死を重ね合わせて描いたものともいえる。その間にあるのが「暴力」なのである。

《切れ目画：象》 (2008)

カッティングプロッタを使用して、ボール紙に刻まれた切れ目で描かれた絵画シリーズの内の一点。データそのものもフリーの3Dデータを利用している。カッティングするマシンは正確に紙をカットしていくが、線の密度の高い部分などに、データにはない剥離などが起こる。こういった「物」ならではの出来事が独特のテイストとなっている。

《朝日新聞『論壇時評』CGビジュアル》(2010~)

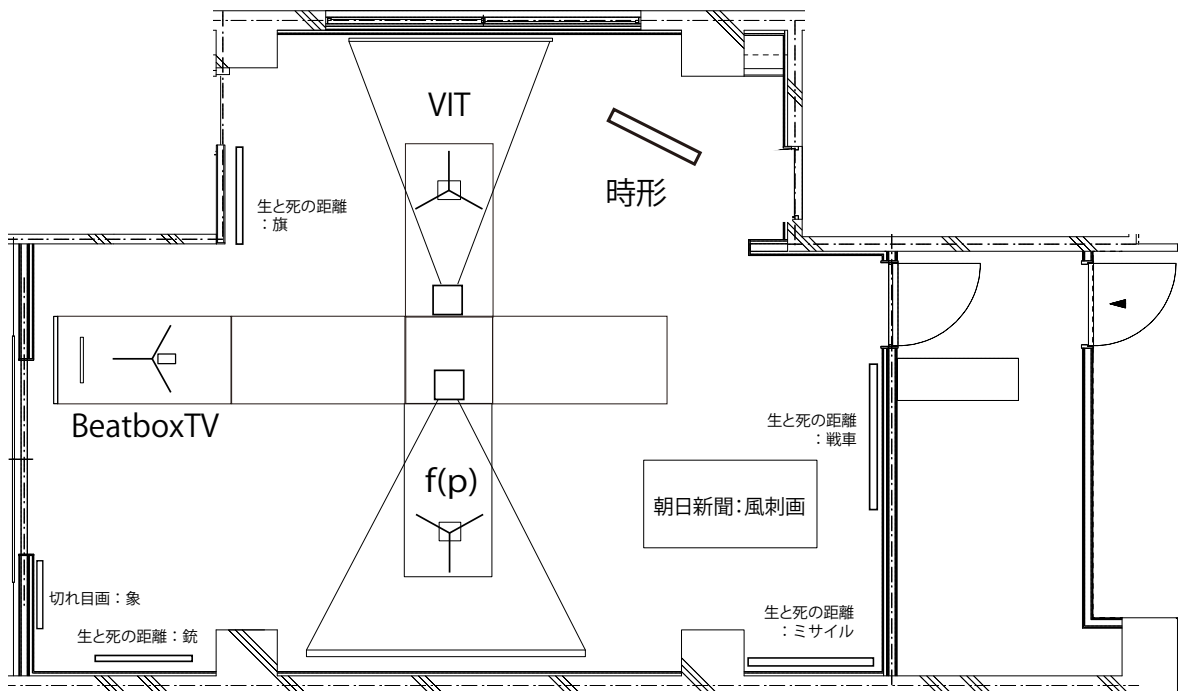
新聞の紙面上に毎月1回与えられる108mm x 193mm の空間。毎月第四木曜日『論壇時評』と共に掲載される、現代社会をイメージしたCGによるアート作品。そのそれぞれが、その時期に起きた社会的な出来事をモチーフとしており、これまで12年間絶えることなく継続されてきた。新聞のざらついた紙面上に広がるモノクロームの小さな平面空間には、「日付の刻まれたビジュアル」が時代の痕跡として刻まれ続けていく。

《時形(とけい)》(2022 新作)

ほとんど針だけで構成された時計を考案、造形。それぞれの中心を持つ針によって構成される。

小阪淳 (Jun KOSAKA)

美術家。1994年 - 2000年 SFマガジン (早川書房) 担当。SF文学の装画を手がける。2004年 - 2014年沖縄県ワンダーミュージアムに作品常設。2006年Sony ExploraScience (北京) に4作品常設。文部科学省「一家に一枚宇宙図 2007」制作に参加。2007年カンヌ国際広告祭2007Cyber Lions銅賞受賞。2000年~朝日新聞にビジュアル連載。2011年東京都写真美術館「見えない世界のみつめ方」参加、展示作品「VIT2.0」が収蔵される。2018年種子島宇宙芸術祭参加。2020年Society for Arts and Technology (カナダ) において宮木朝子との共作「Echolalia II」が選抜、上映される。



響体Live Vol.1 “Unbuilt place” その後 .. ~ 未来の「作られない場所」 ~ + トークライブ:宇宙図からシミュレーション図へ

P1 アクースマティック・エレクトロニカのコンピレーションアルバム 『Unbuilt Place』 (2019) trailer

ビジュアル：小阪淳

音楽：及川潤耶 《Parhelion-Ice crystal and light》高橋征司 《fluent》

梅沢英樹 《Inutile》小阪 淳 《Inward》宮木朝子 《Berceuse -揺籃歌-》

成田和子 《Oiseaux dans l'espace électronique -電子空間の鳥-》

クリスチャン・ザネジ 《Paysage électronique avec train (2006-2012) First part》

-コンピレーションアルバム 『Unbuilt Place』 (2019年7月3日リリース) について-

現代音楽とエレクトロニカの境界領域に響く、〈インナー・アンビエンス〉を追求するレーベル初のコンピレーションアルバム 『Unbuilt Place』。ミュージック・コンクレートの創始者シェフェールに直接学んだ最後の世代を代表する先鋭な作曲家、クリスチャン・ザネジ (Ina-GRMディレクター/ラジオ・フランスの現代電子音楽をセレクト、オンエアするラジオ番組Electrain Nuitプロデューサー) の問題作の他、日仏独で横断的活動を展開する作家の作品をセレクト。種子島宇宙芸術祭2017でも話題を呼んだ小阪淳のフラクタル生成を元にした映像をベースに、各トラックをビジュアル化したフルカラーブック付き。(アートディレクション:小阪淳)

P2 『Unbuilt place』 select 5.1ch version (remix by 宮木朝子)

映像：小阪淳 (展示作品《f(p)》によるインタラクティブ・イメージ)

音楽：高橋征司 《fluent》

本作では故郷青森でフィールドレコーディングした様々な雪の音-雪が積もる音/木に積もった雪が落下する音/雪原を歩く音-を用い、その音にならない聴感覚を表現しようと試みた。Anne Carson の詩の朗読 (“The Life of Towns - Town on the Way through God's woods" 1995, Anne Carson, from Plainwater) は、『N41°』のリリース後しばらく経って交流する事となったボストンに暮らす友人によるもの。望郷の音楽を作る自分と故郷を去った者の間に生まれたコミュニケーションを何かしら作品に残したいと思い、fluent を送ったところこの詩を読んでくれた。

小阪 淳 《Inward》

この作品の元となっている音は、自宅の窓が生み出したものである。このワンルームマンションは気密性が高く、窓を閉めきって換気扇を回すと、気圧の差異でドアすら開けるのが困難になるほどだ。この状態で一つの窓をほんの少しだけ開けると、空気が大量に流れ込み、その隙間を通過する際に音を生み出す。この音は隙間の幅により音程を持ち、極めて豊かな倍音と、心地よい非倍音成分を含む。まるで人の声のように聞こえるこの音によって、私は目には見えない人々がそこに存在するような幻想にとらわれる。窓の隙間と部屋と換気扇が構成するシステムを楽器と考えるならば、私は楽器の内部に佇み、妙な幻想にとらわれながら、録音をしていたと言える。この幻想を、録音された音を素材にして描写したのがこの作品。決して広はない部屋であっても、「歌われた空間」は広大な広がりを持つことができる。

宮木朝子 《Berceuse -揺籃歌-》

かつてオセアニアに存在した子守歌は、「無文字社会の大人が歴史を記録する意味合いを持った、一定の音型ないし旋律型を長時間反復することによって子供を眠りに誘う場」(山口修) だったという。この作品は、自作のソプラノとピアノの作品 (vo.吉川夏野) と、yura yayoi さんより託された声素材、ヴァイオリンソロの作品の音 (vl.林原澄音) などが元になっている。意図的に発声前・間のノイズ部分に注目して加工、音色の層の変化を意識した。

P3 《 Passion in Air - AI 自動作曲との協働あるいは対立による》 (2022)

音楽：宮木 朝子 映像：小阪淳 AIプログラミング：大谷紀子

曲との共通キーワードから生成したAIによるイメージ画像を元に制作された映像との、マルチチャンネルAudiovisual作品。Bachの口短調の曲数曲をあるルールで簡易化した状態でAIに学習させ出力されたフレーズが曲の核となっている。原曲は平均律クラヴィーア曲集 第1巻第24番口短調よりプレリュードとフーガのテーマと、口短調ミサ曲の冒頭部分で、人間が学習しremixという形で出力した部分と、AIが出力したフレーズの解釈がマルチチャンネル空間の中で対峙あるいは並列される。交わることのなかった両者は、モーフィングによって空間内で浸透し合い、歪つなレクイエムを奏で始める。

休憩

P4 小阪淳 自作について/レクチャートーク

P5 高梨直紘 × 小阪淳 対談 宇宙図からシミュレーション図へ

P6 《 Beat Box video 》

映像・音楽：小阪淳

この作品はビデオカメラによって撮影された様々な映像を、その音の強弱に従ってカットアンドペーストし構成されたものである。あらゆる音は、音程を持つ要素として解釈されて再構成されていく。樂器的、あるいは非樂器的な音が、構成されて音楽らしきものとなり、それぞれの音がもともと持っていた意味は失われている。これらは基本的にコンピュータが自動的に行う作業だが、この作品は、できるだけ単純な自動処理によって、音楽が現れるかどうかを試すものである。音に与えられる加工は、あらかじめ決められたスケールに従った、わずかな音程の調整と、再生のタイミングだ。無数の音が重なりは無数の映像の重なりを生み出す。この重なりは、何らかの抽象性を生み出しているだろうか。そしてこれは「芸術」作品なのだろうか。

—出演者プロフィール—

宮木 朝子 Asako MIYAKI

作曲家、空間音響作家。知覚横断的イマーシブ音響作品制作、立体音響ライブ、インスタレーションや全天周映像の音楽制作など、空間音響による芸術表現を中心に活動。「坂本龍一 | 設置音楽展コンテスト」最優秀賞他、受賞多数。作品はICMC、NYCEMF、MUSICACOUSTICA他で上演、NHK-FM「現代の音楽」、Radio france「ÉLECTRAIN DE NUIT」「Electromania」で放送されている。

高梨直紘 Naohiro TAKANASHI

天文学普及プロジェクト「天プラ」代表。東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム特任准教授。1979年生まれ、広島県出身。理学博士。元々の専門は光赤外天文学。天文学と社会のより良い関係をどのように構想し、実装できるかに関心をもって活動している。〈一家に1枚宇宙図〉の制作委員のひとり。趣味は釣り。

音響：君島結（ツバメスタジオ）

設営協力：羽藤雄次

響体Live Vol.2 “Evangelium” から “YADORI へ” ~ 「映像楽譜」と仮想空間

P1 アルバム『Unbuilt place』（2019）より《Inward》

音楽・映像：小阪 淳

この作品の元となっている音は、自宅の窓が生み出したものである。このワンルームマンションは気密性が高く、窓を閉めきって換気扇を回すと、気圧の差異でドアすら開けるのが困難になるほどだ。この状態で一つの窓をほんの少しだけ開けると、空気が大量に流れ込み、その隙間を通過する際に音を生み出す。この音は隙間の幅により音程を持ち、極めて豊かな倍音と、心地よい非倍音成分を含む。まるで人の声のように聞こえるこの音によって、私は目には見えない人々がそこに存在するような幻想にとらわれる。窓の隙間と部屋と換気扇が構成するシステムを楽器と考えるならば、私は楽器の内部に佇み、妙な幻想にとらわれながら、録音をしていたと言える。この幻想を、録音された音を素材にして描写したのがこの作品。決して広はない部屋であっても、「歌われた空間」は広大な広がりを持つことができる。

P2 《Beat Box video》（2015）

映像・音楽：小阪淳

この作品はビデオカメラによって撮影された様々な映像を、その音の強弱に従ってカットアンドペーストし構成されたものである。あらゆる音は、音程を持つ要素として解釈されて再構成されていく。楽器的、あるいは非楽器的な音が、構成されて音楽らしきものとなり、それぞれの音がもともと持っていた意味は失われている。これらは基本的にコンピュータが自動的に行う作業だが、この作品は、できるだけ単純な自動処理によって、音楽が現れるかどうかを試すものである。音に与えられる加工は、あらかじめ決められたスケールに従った、わずかな音程の調整と、再生のタイミングだ。無数の音が重なりは無数の映像の重なりを生み出す。この重なりは、何らかの抽象性を生み出しているだろうか。そしてこれは「芸術」作品なのだろうか。

P3 《MAKIGINU -サラウンド音響と映像のための》（2019）

映像：小阪 淳 音楽：宮木朝子

『巻絹』とは、能の演目のひとつで、紀州の山中がその舞台である。帝がみる霊夢がきっかけとなるその物語は、巻絹を奉納する役を仰せつかった使者が、梅の香りに誘われその役割を中断してまで和歌を読むくんだりなど、香りと聖なる気配とに満たされつつ進行する。物語の見せ場では、和歌の持つ神秘的な力が、音無天神の霊がのりうつった巫女によって示される。そこで巫女は、和歌の徳を賛美しながら神がかりの状態で狂い舞う。本作品は、この物語の持つ霊的気配をイメージの主軸にする一方で、「巻絹」という多肉植物の、白糸を身に纏ったその造形から導かれたイメージを電子音響と映像の構造の要素に取り入れて、複層的な時空間を提示する。絹の巻物、巫女の羽衣、巻絹の葉が纏う白糸の感触などの触覚的要素は、音響変調の際にも反映されている。能舞台の空間の中、身体が存在無しに、音と光の投影のみで、いかにこの多知覚的気配に満ちた物語を変換できるだろうか。主な音の素材は、ファルセットヴォイス（vo.Takuya Kanna）、女声（vo.Yayoi Yura）その他金属系素材、環境音などを録音したもの、2018年2月ギメ東洋美術館にて開かれたVOYAGES IMAGINESの委嘱作品制作時に音源として提供された、美術館所有の能の上演時の音源も一部使用している。尚、本作品は2019年りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館〈能楽堂〉にて初演されている。

休憩

P4 《Evangelium - for saxophone solo and electronics》（2009）

音楽：宮木朝子 サクソフォーン：大石将紀

Evangelium＝善き報せ（福音）。不可視の場所から不意に告げられるもの- 受胎告知の瞬間、あるいは遠い宇宙の果てから飛来してくる光線や電波。時間的距離と空間的距離が一致することを告げる光の瞬き。

この曲では時の凝固と融解の間の各状態が変換された音響空間をイメージし、シンプルな比率による音程を連ねることで、音の線を空間に振動の軌跡として描きながら、瞬間に残る響きを時間軸と空間軸の双方向に積み重ねてゆく。

それは録音された同じ発音行為の電子変換の際にも行われ、流れるような音の線が時に周期をつくりながら、時にある瞬間が引き伸ばされ凝固した音響の固まりとなり、時間軸方向へのエネルギーを音響の内側に封じ込めてゆく。結晶形成までの時間経過を内側に畳み込みながらエネルギーを孕んで存在する鉱石のように。（2009年初演時のプログラムノートより）

P5 《 Echolalia（反響言語） II 》 (2019)

音楽：宮木朝子 映像：小阪淳

本作品はVOCALOIDの音声を中心とした電子音響音楽とフラクタル映像によるvisual music作品である。

”Echolalia”とは性別を持たない架空の妖精(vocaloid)のことで、その肉体は声の内部に封じ込められている。この盲目の妖精は、自らが発する声の反響や残響を手がかりにして次第に外界の世界を認識し始め、視覚の世界に変換してゆく。それは実際のスクリーンに映し出される。映像は、フラクタル関数を使った自動生成のオブジェクトによるアニメーションで構成されている。自作のプログラムをUnityというゲームエンジン（ゲームを作るためのプログラム環境）上で走らせて生成している。関数のパラメータを変えることにより様々なオブジェクトが現れ、それは私たちの世界に実在する自然物や人工物に似ることもある。全く意思のないフラクタル関数が、とても印象的なオブジェクトを無限に生み続ける。尚、”echolalia(反響言語)”とは、精神医学の用語で、自閉症スペクトラムの子どもの治癒に向かうプロセスの中でみられる独自の発声現象を指す。本作品はSociété des arts technologiques [SAT] Experimental Art Films for “le Foyer” Satosphere（モントリオール）の公募によって選出され、2020年1月～3月公開上映された。

P6 《 Yadori_Scape_Notation- game映像と楽器奏者のための（2022 5.1ch version） 》

映像：小阪 淳 音楽：宮木朝子 サクソフォーン：大石将紀

一つの「ヴァーチャル・ランドスケープ」として、VRのゲームエンジンによって制作された実際に探索できる環境としての映像が投影される。ヴァーチャル・門天ホールの中に抽象的なオブジェクトが出現することからゲーム＝上演は開始され、SAX奏者がリアルタイムのゲームプレイ＝演奏を行う。演奏者は作曲者の意思が「宿った」状態の「アバター（分身）」として位置づけられ、ゲームの空間内を演奏行為によって”探索”し、その出来事、事物を”拡張”する。実在の空間と虚像としての空間が接続されるきっかけは、立ち会う側の知覚の攪乱である。この上演＝ゲームは、関わる者すべてにとって、視覚・聴覚・体性感覚の不確かさと、知覚刺激によって操作される心理状態との複雑な関係性に投げ込まれる体験となる。2022年夏両国アートフェスティバル委嘱作品として9.1chのヴァージョンで初演された。

出演者プロフィール

宮木 朝子 Asako MIYAKI

作曲家、空間音響作家。知覚横断的イマーシブ音響作品制作、立体音響ライブ、インスタレーションや全天周映像の音楽制作など、空間音響による芸術表現を中心に活動。「坂本龍一 | 設置音楽展コンテスト」最優秀賞他、受賞多数。作品はICMC、NYCEMF、MUSICACOUSTICA他で上演、NHK-FM「現代の音楽」、Radio france「ÉLECTRAIN DE NUIT」「Electromania」で放送されている。

大石将紀 Masaniri OISHI

東京藝術大学卒業、同大学大学院修了。渡仏しパリ国立高等音楽院卒業。国内、ヨーロッパ、アジアでの音楽祭出演、リサイタルやマスタークラスの開催、ラジオ、テレビ出演、TVCM録音、(一財)地域創造の支援アーティストとして全国でアウトリーチを展開するなど幅広く活動中。14年「東京現音計画」で第13回佐治敬三賞、20年2枚目のアルバム「SMOKE」が令和元年度文化庁芸術祭優秀賞受賞。現在、大阪音楽大学特任准教授、東京藝術大学、洗足学園音楽大学、エリザベト音楽大学講師。

音響：君島結（ツバメスタジオ）

設営協力：羽藤雄次